

(2) 第2分科会 集団づくり ア 実践報告

<報告1>

一人一人を大切にした
仲間づくりをめざして

所 属 三木市立みなぎ台小学校

I はじめに

みなぎ台小学校は、児童数 50 人で、2・3 年が 1 学級、4・5 年が 1 学級と複式学級が 2 つある超小規模校である。小規模校の良さを生かして、1・2 年 3・4 年 5・6 年で体育、音楽、図工、生活、家庭科を学習している。2021 年度には吉川地区の 3 校が統合することになっており、地域を大切に思う気持ちや仲間づくりを大切にしたい教育活動を実践している。また、道徳・人権教育のめあてを「よりよく生きる力を引き出す一互いに思いやり 自他を大切に育てる」と設定した。今年度当初は臨時休校期間が長く、学力を保障するための学習時間の確保が課題となる中、自他ともに大切に感じ合い、認め合う活動を仕組むことで、統合後にも一人一人が居心地よく助け合える仲間づくりに発展させていきたい。

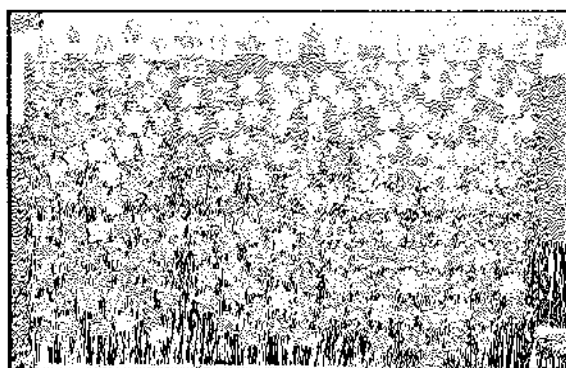
II 取組

1 私も素敵、あなたも素敵を感じる活動
次の(1)、(2)に挙げる 2 つの活動は、みなぎ台小学校で 10 年以上前から継続している活動である。自尊感情を高め、他者評価も受けることで仲間の一員としての喜びやまとまりが感じとれる。年に 1 回ずつではあるが、確実に機会を設けることで、意欲的に、また自他の成長ぶりを確認できる活動である。コモンホール（本校の校舎内にある比較的広いスペース）に全校生が書いた

カードを掲示することにより、お互いの良い所を確認する手段となっている。そして、給食時の放送で、教職員がひとり一枚の選りすぐりのカードを、心を込めて読みあげ、子どもたちは教室でうれしそうに耳を澄ませている。自他共にお互いのよさが確認できる機会となっている。さらには、自分が書いた星や花をキャリアノートに綴っていくことで、以前の気持ちと比較でき、自分の心の成長を確かめることができる。保護者や地域の方にも参加を呼びかけ、ポスト投函や子どもを通じて集めている。大人の視点になって考えてみた「大人の私のいいところ」を知り、こんな人になりたいという憧れをもつ機会にもなっている。これらの掲示とともに、さまざまな人権に関する絵本も紹介することで、人権尊重の気づきを増やしていく工夫をしている。

(1) かがやけ私の星

1 学期に行う人権行事で、「自分自身をかけがえのない存在として認め、自分を大切に育てる」ことをめあてとした活動である。絵本『しょうぼうじどうしゃ じぶた』（渡辺茂男・作 山本忠敬・挿絵 福音館書店）を使って事前学習をした後、自分のいい所やがんばって努力していることを星型のカードに書く。自分を見つめ、自分のいい所やがんばっている自分を認める機会である。成長とともに深く自分を見つめた内容が書けるようになっている。



<かがやけ私の星>

(2) みなぎ花咲き山

2学期には、友だちのいいところやがんばっていること、してもらってうれしかったことなどを花のカードに書く活動「みなぎ花咲き山」を行っている。絵本『花咲き山』（斎藤隆介・作 滝平二郎・挿絵 岩崎書店）を使って人権集会をした後、友だちのいい所やこんなことをしてもらった時の気持ちや、言葉をかけてもらってうれしかったことなど、自分の感情に改めて気づく機会となっている。他者の良さを確認することで、やさしい、温かい気持ちを持つ機会になるとともに、友だちが自分のことを認めてくれていると知ること、「がんばってよかった」「もっとがんばろう」などの意欲につながっている。



<みなぎ花咲き山>

2 教育活動を通して行う共通理解

(1) 「いいところ見つけ」

日々の学校生活の中で、自分や友だちの「いいところ見つけ」を取り入れる。

(例) 朝の会・終わりの会での「いいところ見つけ」「今日の花まるさん」など

(2) 呼称は「～さん」

日々の生活で幾度となく呼び合う名前を丁寧に呼名する習慣を通して、相手を敬う気持ちを育み、性別、障がいの有無、国籍などによる差別をなくす手立てのひとつとしている。この習慣によって、〇〇だからという固定的な考え方から、個を大切に考える考え方ができる基礎づくりにつなげていきたい。

(3) いじめアンケートとあったか週間
(年2回)

子どもにいいアンケートを取った後、担任から一人一人丁寧な聞き取りを行う。いじめの芽を早期に見つけるだけでなく、相談できる関係づくりや子どもの困りを早期にキャッチし解決に向けた手立てとしている。さらには、教職員で内容を共有し、担任が持っている子ども情報を全教職員で共有することで、多様な見方で子ども理解を深めている。この取組によって、子どもと教職員、保護者との関係をより信頼し合える深いものにしていきたい。

(4) 教職員で組織する教育支援委員会と生活指導（いじめ防止）委員会

教職員全員が参加し、児童たちについての共通理解を図り、「こんな指導が有効であった」「こんな時、こんな言葉かけで子どもが輝いた」「こんな視覚支援（工夫）で、個別指導の回数が減った」などの授業や個への関わり方の工夫と改善のための情報交換を図っている。

これによって、個の特性を共有できるため、担任だけではなく教科担任と連携が進み、よりの確な支援や指導ができるようになってきた。

(5) 人権感覚を磨き高める研修

ア オリンピアンを招いて、「自分の夢をつかむ」講演会と親子運動事業

イ パラリンピック競技を親子で体験する事業

ウ SNSなどメディアとの付き合い方についての親子講演会

エ いじめ防止、ハラスメント防止について教職員研修

3 人権学習の取組

(1) 親子人権学習

全学年、年間1回は実施し、保護者参加型でも、通常授業形態でも形態は自由としている。道徳の資料や人権教育の資料（ほほえみなど）を活用したり、人権ゲームなども取り入れたり、それぞれの学級単位で授業をする。授業後の児童や保護者の感想を学級通信等で

還流する。足跡カリキュラム（指導案・略案・ワークシート、事前・事後の学級通信など）を引き継ぐ。データ化できるものはデータにして、引き継いでいる。統合後は、3校の学びをいかに取り入れよりよい教材へ発展させていくかが課題であり、本年度中にまとめる予定である。

(2) 吉川地区4校人権交流学習会

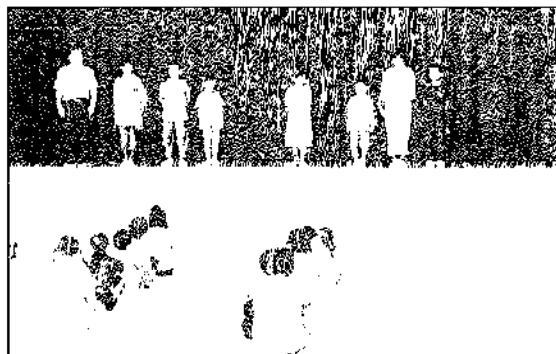
吉川中学校へ進学する4校の6年生が一堂に集まり、人権・同和学習をする。各校で学習した人権学習の総まとめとして講演を聞き、交流を通して人権意識を高め差別解消に向けた意欲を育てる。この機会が人権の学びの基礎となるように継続実施している。

4 スマイル班（異年齢集団）による活動や学習

(1) 集会活動

児童集会で、毎月、誕生月の児童と教職員が舞台に立ち、自分のいい所やがんばっていることなどを発表する。そして、みんなで「おめでとう」と拍手でお祝いをする。生まれてきたことを喜び合う集会であり、誰にも同じ機会があることが大事だと思う。みんなが楽しみにしている心温まる行事である。

また、折り鶴集会やクリスマス集会などの集会活動では、5・6年生がリーダーとなり、全校生で楽しむことができるような運動やひらめきが必要なゲームなどを取り入れた活動を行い、助け合う仲間づくりの活動となっている。



<誕生日集会>



<折り鶴集会>

(2) 生活科（1・2年生合同）2019年度

「レッツゴー！町たんけん」

「おいしい夏野菜を育てよう」

小規模を活かして、1・2年生が合同で生活科の学習をしている。校区探検では、2年生の交通安全を守った行動が1年生のよいお手本になったり、1年生の気づきがマップ作りに活かされたりした。畑の水やり、調理など役割活動でも助け合いの場面が多く見られ、思いやる気持ちや多様な考え方に触れる機会にもなっている。達成感、満足感だけでなく、1・2年生合同で行ったからこそその充実感を覚えていることが感想文にまとめられている。



<夏野菜の調理>

(3) 学級活動 学級会（3・4年生複式学級の取組）

2019年度の4年生5人、3年生8人、計13人の複式学級での学級活動である。初めは、4年生で司会団を構成し、3年生は各役割（司会・黒板記録・ノート記録・計時）の仕事の仕方、進め方などを話し合いに参加しながら学んだ。



<司会の打ち合わせ>

3年生も積極的に意見を出さなければならず、徐々に活発な意見交換ができるようになった。2学期以降は4年生にアドバイザーを任せ、3年生も司会団を担うことで、4年生はモデルとなる責任感と有用感を覚えることができ、3年生は4年生にあこがれを抱き、「あんな風に役割を果たしたい」という目標ができた。学年ごとの5人や8人では味わうことのできない13人の学級としての集団づくりである。



<学級会>

(4) MSC(みなぎっ子 スペシャル チャレンジ 運動会)の取組

本校では2019年度から運動会を午前中の開催とし、途中で親子での「もぐもぐタイム」を入れるなど、一日開催でのお弁当タイムの保護者とのふれあいも大切にしながらのプログラムに変更した。また、本年度はみなぎ台小学校として、最後のMSCとなるので、新型コロナウイルス感染症対策をし、内容を工夫して、MSCを(みなぎっ子 スペシャル チャレンジ)として開催した。

ア 1・2年 3・4年 5・6年の集団としての活動

前述のように本校では、体育、音楽、図工、生活、家庭科を2学年一緒に学習している。体育では、1学期より、MSCを見越して、1・2年 3・4年 5・6年の授業の中で、競争競技を練習してきた。

1・2年はフラフープを使った表現やソーシャルディスタンスを取った玉入れ「小さな世界からLet's Go!」

3・4年は長い棒を使い、相手と距離を取りながら、かつ相手を意識しての玉入れやフラフープをくぐるなどの競争競技「青空のディスタンス」

5・6年は体が引っ付かないように工夫したムカデ競争「引っ付きたくても引っ付けない!」を行った。

MSCのための特別時間割はできるだけ少なくし、体育の授業時間で行うよう計画的に実施した。

イ 体育の時間を使った全校表現 「ダンス体操“あいうえお”リズム にのっていい感じ!!」

MSCでの表現運動もダンス体操として、1・2年 3・4年 5・6年の体育の授業の初めに準備運動として取り入れ、練習時間を生み出した。また、当日は全校生で、グラウンドいっぱい広がって、ダンス体操を披露することで、子どもたちは全校生で演技する一体感を感じたようだ。

この行事に向け、体育担当だけでなく、教職員組織として、異学年の集団を生かしながら感染症対策を意識した工夫や授業時間数確保という複数の課題を解決する経験を積み重ねている。

ウ 「スマイル班」(異年齢集団)活動による全校種目

さらに工夫したことは全校生による全校種目「めざせ パーフェ

クト」である。地域の「スポーツクラブ21」から寄贈していただいた「ストラクトレナー」を使い、スマイル班を赤・白に分けたチーム対抗で、競技した。子どもたちの健闘もむなく、まだ、数字の札が抜けていないところは、地域の大人の方の出番。「われこそは！」という大人にも飛び入り参加していただき、地域の方にも参加いただき楽しい競技となった。

エ スマイル班での全校リレー

さらにスマイル班（異年齢集団）を使った競技が続く。今年は、全校リレーもスマイル班ごとに赤3チーム、白3チームが競った。6年生のリーダーを中心に走順も班ごとに決め、業間休みや昼休みを活用して、自主的に練習している姿は、まさに私たちがめざす集団づくりそのものであった。

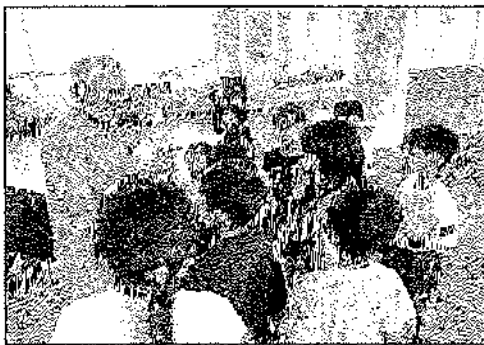
(5) 地域の方との活動

生活科は1・2年の集団で学習している。その中で、地域の方との活動として、みなぎ台老人クラブの方との「花の苗植え」や「昔遊び」がある。

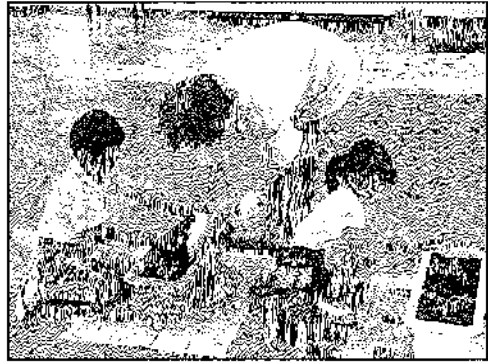
ア 花の苗植え

みなぎ台老人クラブの方が苗植えの方法を丁寧に教えてくださった。

子どもたちは、土の穴のあけ方、苗の持ち方、土のかぶせ方、水のやり方など、苗を傷つけることなく大切に扱うことを知った。一人一プランターを担当し、自分の苗に愛着をもって大切に扱っていた。老人クラブの方の一言一言から、花の苗も子どもたちも大切な命という愛情を感じとっていた。



< 苗植えの説明 >



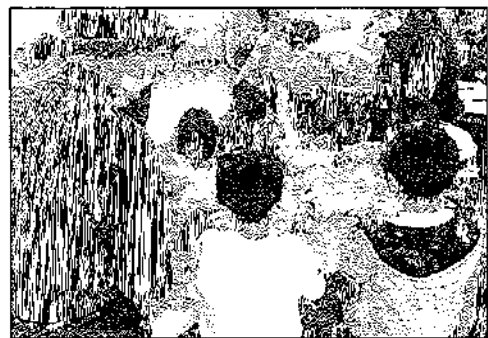
< 苗を植えたよ >

イ 昔遊び

昔から伝わる室内での遊びを、教えていただいた。折り紙、竹とんぼ、駒まわし、お手玉など、まずは老人クラブの方からお手本を見せていただいた。駒のひもの巻き方は、みごとな力加減で、見た目もきれいな渦巻きになっていて、「すごーい」と歓声が上がっていた。身近な方から教えていただくことで、負けん気と憧れを抱き、自分もできるようになりたいという気持ちになり、休み時間には、何度も何度も駒まわしに挑戦して「できる」「もっと上手になることをめざす」姿があった。直接のふれあいがあったからこそ、自然に根気強さが芽生えたようだ。



< 竹とんぼ >



< 折り紙 >

Ⅲ おわりに

2・3年、4・5年は複式学級であるため、生活場面である朝の会や終わりの会、給食などは、この集団で生活を送っている。しかし、教科学習の国語や算数は学年単位で学び、生活、体育、音楽、図工、家庭科などは、1・2年、3・4年、5・6年の複数学年で学習している。必然的に指導者が変わり、学年の組合せも変わること、教職員と子ども、子どもたち同士の関わる場面が増えた。それだけでなく、組合せによる関係性も変わることで、個の活かされる場面が多い。少ない人数の中でも、関係性が多様化することで、個性が認められ、やさしく接してもらったり接したりすることで自己有用感が育ってきた。

来年度は3校が統合することで、今までのような少人数の集団ではなくなるが、今までの取組のような集団づくり（異年齢集団活動など）は引き継いでいきたい。また、統合は多くの子どもたちや教職員に出会うチャンスであり、さまざまな感じ方や多様な考え方にも触れることができる。新たな人間関係の中で、一人一人を大切にするための豊かな人権学習を目指したい。

課題としては、3校が統合することで、特別支援学級の1学級当たりの人数が増えることや他校で個別支援を受けている子どもたちも1校に集まる。このことから、「これまでと同じように手厚い支援が受けられるのか」という保護者の声が聞かれる。また、普通学級にいる配慮を要する子どもたちへの支援についても然りである。さらに今年度より外国籍の子どもが普通学級や特別支援学級に転入してきた。複式学級での教員数では、日本語や学力の遅れに対する支援が現教職員数の中での努力だけでは補えない課題を抱えている。

教職員や支援者の不足が、障がいがある、日本語の理解が不十分な外国籍であるなど支援を必要とする人権弱者が必要な支援を受けられない理由であってはな

らない。すべての子どもの人権を大切にできる学校教育体制を整えていただき、「人権のまち三木」の教育をこれからもつくっていききたい。

Ⅳ 実践報告者からの質問

本校では、人権教育に関する書籍の一覧を作り、職員間で共有している。「かがやけ私の星」の啓発の際に例年『しょうぼうじどうしゃ じぶた』（渡辺茂男・作 山本忠敬・挿絵 福音館書店）を使っている。かつては『ボクだけのこと』（森絵都作・偕成社）を使ったこともある。例年同じ本を使っているの、趣旨に該当する別の本があれば、教えてほしい。〈人権・自尊感情〉

〈報告2〉

日々の教育活動を振り返って

所 属 三木特別支援学校

I はじめに

本校は、小学部10名、中学部12名の小規模な知的障害教育校である。単一の知的障害と重複障害在籍のため、発達段階に大きな差がある。本校の校訓は、「自立」「元気」「ともに伸びる」で、めざす児童生徒像の一つに、「互いに励まし、思いやり、伸びていく子ども」がある。本校の教科の指導の重点に、「学習過程において自己選択や自己決定する力を育てることを基本として、他者とかかわる力やコミュニケーション力を高める学習を創造する」があり、道徳教育・人権教育の指導の重点に、「思いやりに満ちた人間関係を築くとともに、教育活動全体を通して豊かな人権感覚を培いながら、道徳性の育成に努め、のびのびと自己を表現する力を培う」がある。

「ともに伸びる」や「他者とかかわる力」や「思いやりに満ちた人間関係を築く」といった他者とかかわる力を築くために、本校がどのような取組をしているのか、日常生活と教科の場面から紹介していきたい。

II 取組

I 日常生活の指導の中で

(1)朝の会

「日常生活の指導」の時間は毎日1時間目に設定しており、学校到着後の靴の履き替えから、持ち物の整頓、着替え、トイレ、休憩、朝の会と様々な活動を行っている。朝の会以外は、一人で活動することが多く、児童一人一人に合った活動を行っている。

小学部2組の朝の会については、児童5名と教師が3～4名で行っている。司会については、本クラスの最上級生の6年生1名が司会を行っている。

朝の会の内容は、あいさつ、健康観察、今

日の予定、先生からのお話、あいさつである。

朝の会の時間になると、司会の児童が口頭で朝の会の時間であることをクラスのみんなに伝えて、それでも椅子に座っていなかったり、何かで遊んだりしている児童がいれば、その児童の前に行き、座らせたり、おもちゃなどの片づけを手伝ったりしている。あいさつの時、起立していない児童がいる時には、口頭で立つように伝えたり、その児童の前まで行って、立つのを手伝ったりしている。

健康観察の時には、それぞれの児童の前まで行き、「〇〇さん、元気ですか？」と尋ねると、自分の利き手を上げたり、司会者の手にタッチしたりして、その問いかけに応えている。

今日の予定では、移動用の白板に貼ってある日付、曜日、時間割を司会者が読み、その後みんなで復唱している。

先生からのお話では、司会者に指名された教師が話をするようにしている。関わりの多い教師の名前は間違えずに言えるが、指名する教師によっては名前を間違えることもある。同じ教師ばかりを指名するのではなく、違う教師を指名することも増えつつある。

(2)遊びの指導

給食後から5時間目が始まる前の30分ほどの中で児童によってその時間に差があるが「遊びの指導」の時間がある。

遊び場所としては、各教室、図書コーナー、体育館がある。各教室では、1台のiPadの画面を2人で見ながら、ゲームを楽しんでいる姿も見かけられる。しかし、お互いのしたいことが異なってくると、後から画面をのぞき込んで見ていた児童が、先に使用していた児童に対して声かけをせず、勝手に操作して楽しく遊べないことがある。

そのような際には、近くで様子を見ている教師が楽しく遊べなかった原因について児童と一緒に考えたり、マナーについて話をしたりしている。

(3)給食指導

本校では、昨年度まで、小学部の児童と中学部の生徒がランチルームで一緒に給食時間を過ごしていた。しかし、今年度の新型コ

コロナ感染拡大予防のため、ほとんどの児童・生徒が各教室で給食を摂っている。

食事を摂るといことは、基本的な生活習慣の1つであり、集団生活の中では、食事のマナーを身につけることがその集団の中で快適に過ごすためのスキルになっている。

ほとんどの児童が食事を摂ることについて課題を有しており、毎日の給食指導の中でその課題の解決に取り組んでいる。その課題の一例を挙げると、食事が終わっても給食時間の終了まで席について静かに待っていること。手を使わずに、お箸やスプーン、フォークなどを使って食事をすること。もう食事が要らないことを、ジェスチャーやサインで相手に伝えること。お盆に食器を乗せて食缶に返すこと。食事を残した時には、お椀の残り物を食缶に返すこと。今挙げた課題の一つひとつを達成することにより、その課題を持っている児童個人の生活の質を高めるだけでなく、社会参加していく上での必要な資質の向上にも繋がっていくと考えて取り組んでいる。

2 教科指導の中で

(1)国算B/自活

本教科は、小学部の児童が半分に分かれて授業を行っている。その内の一クラスの学習について紹介する。

授業に、「集団遊び」の活動がある。今年度は、前半に魚つりゲームを、後半にドキドキアンパンチゲームを行っている。

魚つりゲームは、魚の形をした厚紙に魚の絵が描いてあり、その口にクリップを付けている魚を、糸の先に磁石を付けた竿で釣るといゲームである。

ゲームを始める前に、じゃんけんをして一番勝った人から時計周りに順番に1回ずつ釣りをする。じゃんけんは、棒状の先端に指の模型がついているおもちゃで行う。その棒についているボタンを押して離すと、先端についている指がグー、チョキ、パーのいずれかの形で止まる。

このじゃんけんでは、みんなが「じゃんけん」と言ったら、ボタンを押して、「ぼん」でボタンを離すのがおおよそのタイミングである。しかし、「ぼん」の掛け声の後で、負け

たと考えてもう一回押してしまう児童があり、「ぼん」の掛け声の後、またボタンを押すことはこのじゃんけんのルールとしては、いけないことをその都度伝えている。

じゃんけんが終わって、順番が決まると、一人ずつ竿を持って魚釣りをする。自分が終わると、次の人へ竿を渡す。その時、釣りが終わった人から、次の人へ竿を渡すことを約束している。どうしても早く釣りたい児童は、その約束を破って、竿を取りに行くことがある。その時には、もう一度やり直しさせるか、それができない時には、「次の人に竿を渡すときには、釣り終わった人が渡しますよ」と言って注意する。

釣りを待っている児童の中で、なかなか釣れない児童の持っている竿の磁石をつかんで魚のクリップにつけて釣らせようとする児童も出てきた。この行為は、早く釣らせて自分の番が回って欲しいと思っているのか、それとも手伝ってあげているのかがわかりにくいこともあるが、「〇〇さん、手伝ってあげてくれたのね。でも、□□さんに自分で釣らせてあげてね」と言って、その行為を理解しつつ、今後しないように伝えている。

(2)音楽

音楽では、曲「山の音楽家」の合奏を行った。楽器は、カスタネット、マラカス、タンブリン、鈴などを用い、3つのグループに分かれて演奏をした。3つのグループには、ことり、たぬき、こりすとグループ名を付けて、グループ毎に演奏する際には、指揮者の教師がそのグループの動物が描かれている札を持ち、演奏するグループを伝えた。演奏するグループ以外は、演奏せずに待つことになり、他のグループの演奏を聴く時と自分のグループが演奏する時を作りみんなで演奏していることを意識づけさせた。

(3)図工

図工では、個人で作品作りをすることが多いが、全員で1つの作品を作る機会もある。例を挙げると、学習発表会の背景を作る際に、個人で色を塗った画用紙を1枚の模造紙に張り付けて家の壁を表現した。また、模造紙を3枚ほど横に並べて張り付け、その模造紙

に絵の具を使って川を描いた。3人の児童が刷毛を使って、水色の絵の具で川の流れを描いた。7人の児童は、水中の泡のようなものを判子で押して描いた。川の絵を作成する時には、川や水の泡がまだ描かれていない所で、友だちの作業の邪魔にならないところを探して作業している児童がいた。しかし、自分のすぐ傍に友だちがいて、ぶつかりそうになったり、友だちの作業の邪魔になっている児童もいて、教師の声かけにより他者との距離を気づかせることもあった。

(4) 体育

体育の学習でも図工と同じで個人で活動することが多いが、準備体操や準備、リレーなどでは、集団で活動することがある。

準備体操は、列の整頓はしないが列の決まった場所にそれぞれが並んで2列横隊になりスマップの「世界に一つだけの花」の曲で行っている。

体育の学習では、学習に使用するものを学習時間内に準備することがほとんどで、一人で準備できるものもあるが、マットや跳び箱など教師と児童たちで準備するものもある。児童の学年や発達段階、障害の状態によって、その児童にできることを通して、教師や友だちと一緒に準備をしている。例えば、ハードルの準備では、一人で持ち、所定の場所における児童もいれば、教師と2人でハードルを持って準備している児童もいる。平均台の準備では、片方の端は、児童1人で持ち、もう片方は教師と児童が持って運んだりすることもある。

リレーでは、段ボール箱を両手で押して、その箱をバトン代わりにする箱押しリレーを行った。箱を押す速さの差は大分あるが、箱を押す距離を調節してみんなが最後まで箱を押して次の走者に渡すまで頑張っている。リレーの勝負が速さにあることを理解している児童は、できるだけ速く箱を押そうとする。リレーの勝負が理解しにくい児童は、時には速く、ある時にはゆっくりと自分のペースで箱を押している。また、勝敗にこだわっている児童は、自分のチームの友だちを一生懸命応援し、自分の番がきたら、全速力で箱を押している。勝負に負けても、自分の速

さを周りの教師に認められて勝敗を気にする気持ちが少しは、和らぐこともある。

III おわりに(成果と課題)

本校の小学部の日々の教育活動を振り返って、「ともに伸びる」や「他者とかかわる力」や「思いやりに満ちた人間関係を築く」といった他者とかかわる力を築くために、本校がどのような取組をしているのかという視点で綴ってきた。

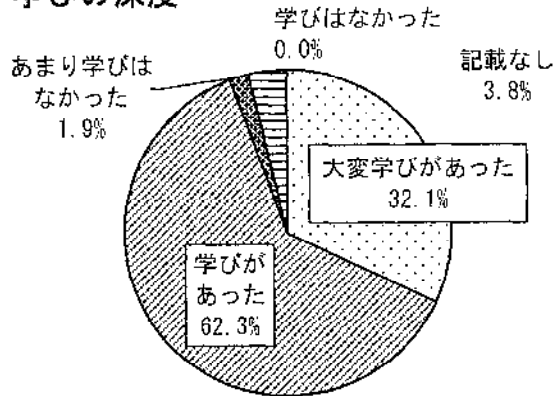
小学部においては、学年、発達段階、障害の状況が一人一人異なっており、教育活動全般を通して、個対個で関わっていることが多い。しかしながら、本校では他者との関係を築くために、身近な存在としての教師とのかかわりが最初に挙げられる。そして、教師との関係を保ちつつ、その関係を友だちに広げていくことになる。その際、学習内容や活動で他者との関りを意図的に仕組んだり、その場で起こった他者との問題をよい機会と捉えて解決したりしながら、他者との関わりを築く芽を養ってきている。このような取組の中で、自分の思いを調節できるようになりつつある児童や、友だちの頑張りを認めることができる児童もでてきた。

課題としては、個対個になりがちな教育活動に、いかに他者との関わりをめあてとした教育活動を取り入れていくかにあると考える。個対個の教育活動も本校にとっては、とても重要なものではあるが、それだけでは育てられない力もある。将来の学校生活や社会生活、職業生活を見据えると、他者と関わる力を育てることはとても大切なことである。目の前にいる児童の現時点での課題を捉えて教育していくこともさることながら、将来の児童の姿を想像して教育をしていくことも大切である。

IV 実践報告者からの質問

本校における「他者とかかわる力を伸ばす取組」について報告してきましたが、もっと有効であると思われる教育活動はありませんか。

イ 学びの深度



ウ 感想

- ・異年齢集団による活動や学習、地域との多様な関係性が子どもたちの豊かな心を育む糧になっていると理解しました。
- ・同じ小規模校として、大事にされてきた取組の大切さに改めて気づきました。来年度統合するにあたり、すべての児童に、個々にあった支援が行き届くようにしたいという思いは同じです。
- ・来年度吉川3校が統合します。各校が積み上げてきた人権教育を新たな集団になっても職員間で引き継ぎ、より豊かな人権教育(学習)にしなければと思いました。
- ・2校とも、集団づくりに向けて学校全体で計画的・意図的に取り組まれている様子がよくわかり、参考になりました。コツコツ積み上げる大切さを改めて感じました。
- ・親子人権学習の継続が参考になりました。形を変えても続けることが大切だと考えます。
- ・自己有用感を高めていけるようなさまざまな活動をされていてよいと思いました。異年齢集団、親子、教師、地域、みんなで取り組んでいくことが健やかな成長に繋がると思います。
- ・今日の三木市における学校教育のあり方が見えてよかったです。ゲームなどが普及し、さらにコロナ禍でますます他人に

対して無関心になりがちな現代において、人間関係の結びつき、障害も含めて個として受け入れる、誰もが生きやすい社会の実現に向けて、より豊かな人間形成に取り組んでいくことを願っています。

- ・みなぎ台小では、自尊感情を高める取組を継続して行っており、その成果が出ているように感じました。三木市全体にも広がっていけるよう情報共有していきたいです。
- ・"かがやけ私の星""みなぎ花咲き山"の活動を10年以上も続けられており、素晴らしいです。本校では、本年度初めて同じような取組を始め、みんなで心がほっこりする時間になりました。継続していきたいです。
- ・自尊感情を高める取組がさまざまな方法で行われていて、とても参考になりました。照れや反抗心、めんどくささを態度に出してしまう中学生は、なかなか素直にほめ合うことができませんが、さまざまな角度からアプローチを行い、彼らの自尊感情を高めていきたいと思います。
- ・小学校も特別支援学校も一人一人を大切にしたい集団づくりに努めておられると感じ、よい刺激になりました。各校、さまざまな課題を抱えておられるようですが、人権尊重の視点に立った教育実践を今後とも行う必要があると思いました。
- ・コロナ禍だからこそその集団づくりは大切だと思いました。
- ・「私も素敵、あなたも素敵」の取組が素晴らしいと思いました。視覚的に確認できるので、気づきを実感できると思いました。
- ・小学校では、6~11才にまたがる異年齢集団で構成されており、体力、知力とも1年生と6年生では大きな差異があります。異年齢集団活動をとおして、下級生をいたわる優しさと自分の力強さを他の人に使うことの意義を感覚として掴みやすいと考えます。そこから自己肯定感を育み、人に感謝される喜び、人の役に立つことができた自分に対する力が湧き起

くる、そんな6年間をこれからも構築してください。

- ・キャリアノートを活用して成長をとらえる取組を試みたいと思いました。随所に工夫された取組があります。統合や自校の課題を見据えた取組に感心しました。意図的に全活動に人とのかかわりをするようにしているところは大いに学びたいです。また社会への適応を考えて取り組もうとすることに感心しました。
- ・特別支援学校の教育内容が具体的につづられていて様子が想像できました。さまざまな個性の子どもたちであるからこそ、日頃の教育は教師の指導や手立ての部分も多く大変であるだろうなと思いました。だからこそ、これが有効ということはなかなか言えないのですが、日頃の教育活動の中で、教師が常に「ともに伸びる」「他者と関わる力を伸ばす」ことを意識し、教育活動に当たるのが何よりと思います。
- ・両校の取組は、ともに一人一人の子どもに視点を置きながら、自尊感情を高めたり、達成感を味わせたりする活動をうまく指導の場としてとらえられています。個と個のつながりから、集団に広がる温かい空気感を感じる素晴らしい発表でした。吉川の小学校は、今後統合しますが、それぞれの取組が進化し、よりよい仲間づくり・集団づくりに生かされることを期待します。
- ・活動全体を通じて、相手のことを認め、同時に自己肯定感を得られるように感じられました。学校・保護者・地域の枠を超えたつながりが大変魅力を感じました。
- ・他者とのかかわりが必要不可欠である現代社会ですが、考え方や思いは一人一人異なるのでとても難しいと思います。その中で、少しでも自分と異なる考えを認め受け入れることが大切になると思うので、報告にあった日々の取組はとても重要な役割をもつと考えます。
- ・高等学校以外での児童・生徒へのかかわ

り方がよく分かりました。これらの取組を高校での人権教育等にも活かしていきたいです。

- ・複式学級の特性を「子どもたちの多様な出会いの場」「多くの指導者との出会いの場」として、生かしていると思いました。特支の課題として、個対個になりがちであることを挙げられてクリアしようとしているところも素晴らしいと思います。
- ・実践発表からは心あたまる取組がたくさんありました。かかわりの中で感じた感情（うれしさ、憧れ、負けん気、有用感など…）は次へのあたたかい行動につながり、学校全体、家庭、地域と広がって連鎖していくと思います。具体的な事例がたくさん挙げられており、さまざまな取組が成果として表れています。思いやりに満ちた人間関係のスタートは、相手の名前を覚えたり呼んだりすることではないかと思う。健康観察時の「〇〇さん元気ですか」のように、いろいろな活動場面で、他者とのかかわりの入り口として意識するのもよいと思う。
- ・自分の頑張ったことや友だちの良いところを見つけたことを書いたカードを教職員が読み上げることで、子どもが耳を澄ませて聞いて喜んでいたり、お互いの良さを確認できているのが良い取組だなと思いました。
- ・みなぎ台小の取組は、共同の掲示を利用したみんなが参加しお互いを認め合えるわかりやすく効果的な活動や、地域との交流活動に感心しました。また特別支援学校は個人の状況に応じた学習を進めながら、自分の思いと他者への思いやりをどう気づかせるかに熱心に取り組んでいることを教えていただきました。

エ 実践報告者からの質問に対する回答

(7) 報告1の質問に対する回答

- ・四季折々の行事なども積極的に楽しま

れることが必要です。

- ・「にじいろのさかな」(マークス・フィスター作・絵)
- ・1~6年生までに共通の本で読み取られるのは難しいと感じています。今回の人権集会では、「私と小鳥と鈴と」(金子みすゞ)の作品を読んで人権について考えました。
- ・「まざっちゃおう！いろいろないろのおはなし」(フレーベル館) 違う色が混ざり合うことで新しい色が生まれることに気づき、色とりどりのまちに变化していく話です。さまざまな違いに置き換えて読めます。
- ・「あさえとちいさいもうと」「わすれられないおくりもの」人間関係の大切さや、登場人物の立場、気持ちの移り変わりを簡潔にわかりやすく伝えている本だと思います。
- ・「窓をひろげて考えよう」「みんなたいせつ世界人権宣言の絵本」「人種差別」「新ちゃんがないた!」。
- ・市立図書館へ相談されてはいかがでしょうか。「じぶた」に似た、自分を大切にするような絵本はないですか？とお願いするといろいろと提案していただけますよ。
- ・これまで道徳教材以外の本を活用したことがありません。ただし、自分のマイナス面をプラスの言葉で言いかえる学習をしたことがあり、好評でした。
- ・「あしたのことば」森絵都
- ・「わたしのいもうと」(松谷みよ子作)、「わたしのせいじゃない」(クリスチャンソン作)を集団づくり(仲間づくり)の資料としておすすめします。
- ・絵本「ええところ」(くすのきしげのり作、ふるしょうようこ絵、学研)
- ・「いのちの木」「なんだろうなんだろう」「ひとはみな自由」の本がいいと聞きました。
- ・「あおくんときいろちゃん」(レオ・レオニ)はどうでしょうか。

- ・「ぼくはなきました」(くすのきしげのりさく 石井聖岳 絵) よいところを見つけをしようとする男の子の物語です。
- ・「ぼく・わたし」(高島那生) いろんな人がいて、いろんな私がいるけれど、みんながすてきと思える絵本です。色が鮮やかでイラストが素敵です。
- ・福音館書店の「のろまなローラー」はいかがでしょうか。

(イ) 報告2の質問に対する回答

- ・他者から学ぶことはたくさんあるので、もっと年齢差のある人や海外の人などとの交流があればと思います。
- ・他校(小学校・中学校・高校)間において交流の機会を増やしたり、いろいろな障がいがある子どもたちと交流することで、対応の仕方を学んだり、抵抗を軽減させることにつながり、お互い刺激し合えるのではないのでしょうか。
- ・個々にできること、できないことがあるので難しいですね。一人一人が参加し、次の人にバトンを渡すという流れが多いように感じました。2人いないとできないなど、他者がいないと成立しないものにチャレンジするのはいかがでしょうか。
- ・特別支援学校では、教師が大きな役割を担うと思います。私の経験では、同じ作業の積み重ねから人との関係をつくり、安心感をもたせるようにしました。
- ・発達の段階、障がいの状況によるため、難しいかもしれませんが、ペアワークなど、2人で協力しないと達成できないような課題を設けることで、他者を理解し、互いに認め合うことができないのでしょうか。
- ・加古川市でチャンゴ演奏を通じて仲間づくりをしているグループがあります。卒業して別の道に進んでも、ここに仲間がいると思える場所が必要です。このグループに集まる若者は、仲間の動

きに合わせて生き生きと躍動しています。

- ・発達段階に応じて、地域・社会とのかかわりや、身近な人以外の人とも交流しながら、個や集団の力を高めていけば、さらに良いと思いました。特別支援を要する子どもにとって、自ら人とかかわり、コミュニケーションをとること等は、将来の自立した社会生活をめざす上で必要であると思います。
- ・現在取り組まれている朝の会の健康観察での問いかけにプラスして、曜日ごとに異なる質問などを加えることも良いと思えます。
- ・人数が少ないと係や当番の仕事も一人一役になりがちですが、あえて、二人に1つの仕事をまかせてみるのもよいと思えます。
- ・違う学校の児童・教師や地域の方々との交流なども、他者とかかわる力の育成には大切なのかなと思いました。
- ・互いが無関心になるのではなく、支援者のはたらきかけて人と人をつなぐ活動が研究されていると思いました。共に生きていくことを大切に、他校や地域とのかかわりに広げていけるといいと思えます。
- ・身近な存在の友だちから取り組んでいただき、自己と他人が違うこと、自分がされてうれしいことを他人にも行い、されたいやだと思ふことは他人にしないということを粘り強く繰り返すことではないかと思えます。

オ 指導助言

(7) 評価と課題

みなぎ台小学校の「私も素敵、あなたも素敵を感じる活動」は、自分の良いところをカードに書いて全校生が書いたカードをホールに掲示する取組です。給食時の放送で、教職員がひとり1枚の選

りすぐりのカードを、心を込めて読みあげ、子どもたちが教室でうれしそうに耳を澄ませ聞いている姿は、自尊感情を高める機会となっています。来年度の統合に向け、相互の学校の良さを出し合い調整を進める際に、集団づくり行事のより良い進展を模索していただきたいです。三木特別支援学校の「教科指導の中で」は、自立活動における集団遊びの魚つりゲームでの順番決めのじゃんけんや、つる順番を守ることにしています。音楽では合奏の工夫、図工では共同作品への取組、体育では相手との勝ち負けではなく自分がいかにできたかに視点を置いた取組をしています。将来の児童生徒が、どのようにして他者とかかわっていくかを常に見すえながらの取組が必要です。

(イ) 感想

「小学校も特別支援学校も一人一人を大切にされた集団づくりに努めておられると感じ、よい刺激になりました。各校、さまざまな課題を抱えておられるようですが、人権尊重の視点に立った教育実践を今後行う必要があると思えました」や「両校の取組は、ともに一人一人の子どもに視点を置きながら、自尊感情を高めたり、達成感を味わわせたりする活動をうまく指導の場としてとらえられている。個と個のつながりから、集団に広がる温かい空気感を感じる素晴らしい発表でした」など自尊感情を高める取組についての感想が多く寄せられていました。また、「他者との関わりが必要不可欠である現代社会ですが、考え方や思いは一人一人異なるのでとても難しいと思います。少しでも自分と異なる考えを認め受け入れることが大切になると思います」など集団づくりの根幹となる他者理解についての意見も寄せられていました。

(ウ) 質問に対する特徴的な提言

みなぎ台小学校「自尊感情を育む人権教育書籍」への回答。①「まざっちゃおう！いろいろないろのおはなし」— 違う色が混ざり合うことで新しい色が生まれることに気づき、色とりどりのまちに変化していく話でさまざまな違いに置き換えて読めます。②「あさえとちいさいもうと」「わすれられないおくりもの」— 人間関係の大切さや、登場人物の立場、気持ちの移り変わりを簡潔にわかりやすく伝えている本だと思えます。

三木特別支援学校「他者とかかわる力を伸ばす取組」への回答。①「他校間において交流の機会を増やす」— いろいろな障がいのある子どもたちと交流することで対応の仕方を学び、抵抗を軽減させることにつながり、お互いを刺激し合えます。「ペアワークを行う」— 2人で協力しないと達成できないような課題を設けることで、他者を理解し、互いに認め合うことができます。

(エ) まとめ

互いに認め合い共に生きようとする仲間づくりをすすめる第2分科会にふさわしい発表でした。集団づくりの目的は、他者理解が第一であることは自明のことですが、他者の良い所に目を向ける取組が大切であると考えます。また、正しい意見や、自分が言われてうれしい意見を全体の場で発表し自尊感情を高めていくことは、集団づくりにとても大切なことだと考えます。みなぎ台小学校では、小規模校の良さを生かして異年齢集団づくりに取り組まれています。来年度の統合も視野に入れながらの取組ですので、さらに発展されることを期待しています。三木特別支援学校では、個対個になりがちな教育活動に、他者との関わりをめあてとした教育活動をいかに取り入れていくのかを期待しています。コ

コロナ禍の中での紙上発表でしたが、各校の良さを活かした仲間づくりの成果が伝わる実践発表でした。